宮本輝

MIYAMOTO TERU

海岸列車

上

海岸列車

宮本輝

teru miyamoto

毎日新聞社

江苏工业学院图书馆
藏书章

海岸列車（かいがんれつしや）　上

1989年9月15日　印刷
1989年9月30日　発行

著者　宮本（みやもと）　輝（てる）

編集人　沢　畠　毅

発行人　川　合　多喜夫

発行所　毎日新聞社

〒100-51　東京都千代田区一ッ橋
〒530　大阪市北区堂島
〒802　北九州市小倉北区紺屋町
〒450　名古屋市中村区名駅

印刷／精興社
製本／大口製本

© Teru Miyamoto　Printed in Japan 1989

ISBN 4-620-10398-5

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　無人駅　5
第二章　鏡の街　46
第三章　ペーパーナイフ　102
第四章　春雷　149
第五章　断崖　213
第六章　月光　283

木彫　有元利夫
撮影　安齋吉三郎
装幀　菊地信義

海岸列車

上

第一章　無人駅

二十年前から父親代わりとなって自分たち兄妹二人を育ててくれた伯父の初七日が済むと、その翌日、手塚かおりは朝一番の新幹線に乗った。十二月の中旬にしては、いやに温かい東京の朝だったが、山陰地方はうんと寒いだろうと考えて持って来た厚手のコートで膝のあたりを覆い、すぐに目を閉じた。

五日間の、ほとんど不眠の看病、それにつづく通夜と葬儀との疲れで、すぐに眠りこんでしまうだろうと思っていたが、かおりは結局、京都まで一睡も出来なかった。

京都から山陰本線に乗り換え、亀岡を過ぎたころ、やっと少しまどろんだ。しかし、突然の雨が車窓を打ち、それが次第に固い音に変わっていくのに気づいて目をあけると、強い眠気で頭がふらふらするのにもかかわらず、二度とまどろみには戻れなかった。

霰は、豊岡の手前から雪に変わり、城崎に着いたときには、枯れた畑も民家の屋根も薄い雪に包まれていた。かおりは〈あさしお一号〉から降り、二十分後に大阪からやって来る急行列車を待ってベンチに坐った。その急行列車は、城崎から浜坂までの区間は各駅に停車するのである。

そばとうどんを売る売店からは、汁の生温かい湯気が立ちこめて、それはかおりの疲れた心身を不快にさせた。かおりは売店から遠く離れ、コートを着て衿を立て、ベンチに坐った。かおりの目的地は、城崎から鳥取のほうへ向かって五つめの駅の〈鎧〉である。そこは無人駅で、東西に低い山があり、北西に暗い口をあける日本海の小さな入江が切り込んでいる。南側にも低い山並がつづき、三十数戸の民家は、窮屈な山あいの隙間に、人間の気配を感じさせずに密集している。

そこには、かおりの母が住んでいるのである。かおりは、これまでに五回、無人の鎧駅を訪ねているが、一度も母と逢ったことはない。それどころか、駅から入江へとつづく幾つにも折れ曲がった急な坂道の途中まで下りはしたものの、そこからまだ二、三十メートル眼下にある村に足を踏み入れたことすらないのだった。

それは、兄の夏彦も同じだった。伯父の民平にも、かおりにも内緒で、夏彦は高校一年生の冬に、鈍行列車を乗り継いで、東京からはるばる山陰の海沿いの鎧駅まで出向いたが、海に面した急な坂道の、ほんの十メートルばかりを行きつ戻りつしただけで、ついに入江のところまで降りて行くことが出来ず、帰路についたのだった。兄の夏彦は、伯父には決して言わないという約束をさせてから、自分が鎧駅まで行ったことを、当時中学一年生だったかおりに話して聞かせた。――三日前、鎧って駅まで行って来たんだ。かおり、俺、お母さんと逢ったぜ――。

その兄の嘘を信じて、わけのわからない激情の中で身をすくませて泣きじゃくった日から十二年がたっている。

かおりは、雪まじりの風を受けて、ベンチに腰かけたまま、駅のホームのポスターとか看板とかに目をやった。旅館の名が列記された木の看板は、新しく塗り替えられてホームの壁に打ちつけてあり、売店の上には〈ようこそ温泉と蟹の町へ〉と書かれた横長の看板が吊り下がっている。海産物の広告

も、数年前と比べると、幾らか垢抜けてきてはいるものの、かおりは〈かにかまぼこ〉も〈かにちくわ〉も、その文字を見るたびに、いつも伯父への申し訳なさを湧きあがらせる符丁のついた図柄のように感じるのだった。

「まあ、根雪にはならんじゃろ。初雪じゃけ」

「そうそう、根雪にはならんが、あしたの朝までは降りそうやなあ」

改札口から、地元の人らしい中年の女性がホームに歩いて来て、売店の女と言葉を交わし合った。そうか、初雪なのか……。コートのポケットに突っ込んだ片方の手を出し、衿元を合わせて、かおりは胸の中でそうつぶやいた。向かい側のホームに、京都行きの上り特急が入って来た。

かおりは、伯父への言い知れぬ感謝の念に、ひとときひたって、視線をぼんやりと上りの列車に投げていた。伯父の民平は、かおりの両親が離婚したのとほとんど時を同じくして、妻に先立たれ、それ以後、ずっと独身をとおしてきたのだが、そこには、夏彦とかおりという二人の甥と姪の親代わりであることを誠実に遂行しようとした意志が強く働いている。兄妹の父は、妻と離婚して二年後に病死してしまった。しかし、母親はすでに他の男と結婚し、消息が途絶えた。伯父は自分のたったひとりの弟の遺児を引き取り、育て、夏彦だけでなくかおりまでも大学に進学させたのであった。伯父に子供がいなかったということがあったにしても、その行為は、何らかの代償をもくろむものではなかった。二人の兄妹を引き取って、伯父が物質的に得るものはおよそ何ひとつなかったが、浪費しなければならぬ金銭的負担と精神の労苦は数知れなかったに違いないのである。

向こう側のホームで、上り列車があと三分で発車するというアナウンスが響いた。

「あの調子じゃあ、絶対に、間に合いませんよねェ」

その声で横を見ると、コートの衿から、濃い緑と薄い緑とのタータンチェックのマフラーをのぞか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

せた三十七、八歳かと思える男が、かすかに微笑(ほほえ)んで改札口のあたりを見やっていた。かおりが、男の見ているところに目をやると、ともに足の不自由な、やたらに着ぶくれした老夫婦が、上り列車に乗ろうとして、ホームとホームとをつなぐ屋根つきの階段に急いでいる。しかし、その歩き方はおぼつかなく、あと三分で階段を昇り降りし、向こう側のホームに辿り着けるとは思えなかった。

「これは、手伝ってやらないと、乗り遅れるな。あなたは婆(ばあ)さんの尻を押して下さいよ」

男は、かおりにそう言って駆けだした。

かおりは一瞬、ぽかんと男のうしろ姿を見ていたが、男が老夫婦の手荷物を持ってやり、八十歳近い夫のほうの腕をつかんで、

「早く、早く」

と手招きすると、慌ててベンチから立ち上がって走った。

「あなたは、荷物を持ってあげて下さい。押しても引いても転びそうだから、二人をおんぶして、とにかく電車に放り込みますよ」

男は、先に老婆をおんぶし、階段を駆けあがった。

「おーい、ちょっと待ってくれよ」

駅員にそう叫んでいる男の声が聞こえた。かおりは、老夫婦たちの杖(つえ)とおそらく何匹かのカニが入っているらしい箱を持って、男のあとを追った。

「いやあ、ご親切なこって。ありがとさんです」

ひとり残された老人が階段の手すりをつかみ毛糸の帽子を取って、かおりに頭を下げた。かおりが、上り線のホームに駆け降りると同時に、男は若い駅員に、

「こら、きみも手伝わんか」

と命じて、再び階段を昇って行った。かおりは駅員に荷物を手渡した。
「重いなァ。おじいさん、ちょっと太りすぎですよ」
男は老人をおんぶして、階段を降りて来ながら、
「着てる物だけでも五キロはあるんじゃないか？」
と息を弾ませて言った。
無事に老夫婦が乗った列車を見送りながら、男は肩で息をしてベンチに坐り、
「いかに運動不足かがわかりましたよ。もう息があがっちゃった。あの爺さん、石みたいに重たいんだから。膝が、がくがくしてますよ」
と言い、何度も深呼吸をした。かおりは、気だけ焦って、階段を昇ろうとしていた老夫婦の、まるで水の中を走っているかのような手足の動かし方を思い出し、笑いがこみあげて来た。それで、かおりは、細かい雪の中に消えて行こうとしている列車を目で追いながら、手で口元を覆って笑った。男が立ち上がり、
「なんか無理矢理手伝わせて、申し訳なかったですね」
と言って、声を殺して笑った。
「何がおかしいんですか？」
とかおりは訊いた。
「あの爺さん、ぼくにおんぶされながら、なにもそんなに慌てんでもって、文句言うんだから」
「でも、誰にも助けられなくても、案外ちゃんと間に合ったかもしれませんわね」
「そうですね。そういうもんかもしれませんね」
かおりは、自分と同じ旅行者らしい男と顔を見合わせて笑ったが、下り線のホームに目をやって、

あらっと声をあげた。いつのまにやって来たのか、かおりの乗る急行列車が停まり、その発車のベルが鳴っていたのである。

「あのう、失礼します。私、あの列車に乗りますので」

かおりが、ホームを走りながらそう言うと、

「ぼくも乗るんですよ」

男もそう言って走り出し、階段を二段とばしにして、かおりを追い越して行った。下り線のホームに駆け降り、一番近くのドアから列車に乗ろうとして男を見ると、男はまだホームを走りつづけている。ホームの後方に自分の荷物を置いてある様子だった。男は車掌に何か言い、列車の最後尾よりもまだずっと後方に走って行き、ボストンバッグをつかむと車掌に手を振った。それを見届けると、かおりも車内に入り、海側の席に坐った。

列車が動きだすと、すぐに、大きな汚れた水溜りみたいな池の横を過ぎ、あっというまに通り抜ける短いトンネルに入った。それから円山川（まるやまがわ）の河口が見え、城崎港の一部が見えたが、やがて低い山に囲まれた田圃（たんぼ）がつづいた。雪景色の中で、まだ実をつけている柿の木が、何かの火の玉みたいに見えた。

ハンドバッグを膝の上に置き、一息ついて、かおりが小型のスーツケースから時刻表を出したとき、さっきの男が、青いプラスチック製の手提げ籠（かご）をかおりの目の高さに掲げて横に立った。

「はい、忘れ物」

と男は笑顔で言った。かおりは、時刻表のページをひらいたまま、その籠と男とを交互に見つめた。

「私の物じゃありませんけど……」

「えっ、だって、あなたの坐ってたベンチに置いてあったんですよ。これだけぽつんと」

「でも、私のじゃありませんわ」
男は指を自分の額にあてがい、表情を曇らせて、窓外を見たり車内の床に視線を落としたりしていたが、
「困ったな。ぼくは、てっきり、あなたが忘れ物をしたんだと思って……。こりゃ、大変だ。ぼくのやったことは置き引きですよ」
「あのう、車掌さんに事情を話して、次の駅で駅員さんに渡してもらったらいかがですか。そしたら、城崎まで送り返してくれると思いますけど」
「そういうわけにはいかんでしょう。とにかく、誰の物かわからないのを勝手に持って来たんですから。故意に盗んだのに、気が変わって返す気になったって、車掌は考えるかもしれない。仕方がないな。次の駅で降りて、城崎へ引っ返しますよ」
かおりは、何と言ったらいいのかわからなくて、男の顔から視線を外した。自分には何の責任もないと言ってしまえばそれまでなのだが、男は乗り遅れるかもしれないのに、かおりのためにベンチまで走ってから列車に飛び乗ったのに違いなかった。
男が自分の席に戻って行ったあと、列車は三つめのトンネルに入った。かおりは、とりたてて美男子というわけではないが、柔和な顔だちのどこかに堂々としたものを持つ男のことが気になってきた。立派な顔という言葉が浮かんだ。中肉中背で、とくに目立つ体格ではないが、着ているものからだけとは思えない都会的な洗練は、きのうやきょう、男にそなわった道具立てではないことも、かおりには判別出来た。きっと妻も子もいるのだろうが、無邪気さも喪っていない。なかなか上等ね……。かおりは、そうひとりごちて、遠くの入江と、増えてきた民家を眺めた。もうあと四、五分で竹野駅に着く筈である。

かおりは、中学校の入学式の日、伯父が、
「ほう、女らしくなったね。かおりは、もてるぞ。うん、たいしたもんだ。二十歳になったら、もっときれいになるぞ。そのためには、自分を律することが必要だよ」
と言った言葉を、折にふれて思い出すのだった。しかし、伯父が予言したほどには、男子学生に特にもてたという記憶はなかった。けれども、伯父の言葉が嬉しくて、顔を赤らめ自分の部屋にこもり、長いこと鏡の前に坐っていた時間のときめきは、心の奥にしまってある。
伯父は、自分が感じもしないことを、あたかも感じたかのように口にする人ではなかったのである。兄に言わせると、
「お前、ちょっと顔が小さすぎるのに、目が大きすぎるんだよ。鼻も、あと三ミリほど高けりゃなァ。でも、うしろから見たら、いい女だよ。スタイルはいいからな。それは認めてやるよ」
ということになるのだが、かおりは自分の目が、そんなに大きいとは思っていない。きっと顔が小さいから、そう見えるのだと自分で自分を納得させていた。
かおりは、ずいぶん迷ったあげく、席を立って、後部の車輛に行った。男は、がらすきの列車の最後尾に坐っていた。
「やっぱり、車掌さんに相談してみましょう。駄目でもともとですもの」
かおりの言葉は、車掌室にいる車掌に聞こえたのか、いかにも実直そうな中年の車掌が、車掌室のドアを半開きにして、
「何でしょうか？」
と応じ返してきた。男はプラスチック製の籠を持って、車掌室に行くと、事のあらましを説明した。
「はあ……、間違えて持って来たっちゅうわけですか」

小柄な車掌は、プラスチック製の籠に鼻を近づけて嗅いだあと、
「これは柿ですな。熟しすぎて、崩れかけてますよ」
と、至極のんびりした口調で言った。それから、しばらく考え込み、
「いいでしょう。次の駅で駅員に渡しましょう。どのへんに置いてあったか、何か紙きれにでも書いといて下さい」
そう言って、速度をゆるめた列車の窓から顔を出した。男は、ボストンバッグをさぐって、手帳とボールペンを出し、手帳の空白の部分を破ると、籠の置いてあった場所を書きつけた。列車が停まり、車掌が籠と紙きれを持ってホームに降りると、男も列車から出て、一緒に駅員のいるところについて行った。かおりは、窓越しになりゆきを窺いながら、自分の席に戻って行った。
男は、しかめっつらをした駅員と話し込んでいる。車掌だけが笑顔で、列車から降りて来て、雪の積ったホームを歩く地元の人々と言葉を交わしていた。
かおりが、自分の席に坐って、ホームを振り返ると、男の姿も駅員の姿も見えなかった。駅名の書かれた標示板に積っている雪をぼんやり見ているうちに、かおりの中で、伯父が息を引き取る二日前に言った言葉が膨れあがってきた。
――俺は、お前たちに、ずっと嘘をついていたんだ――。
それは、伯父の最期のひとことであった。伯父は、そのあとすぐに昏睡状態に陥り、かおりと夏彦の呼びかけに、ときおりかすかな反応を示すだけで、二度と言葉らしい言葉を口にしないまま、六十四歳の生涯を閉じた。
その嘘とは、おそらく母のことに関してではあるまいか。かおりは、そんな気がしていた。伯父の最期の言葉について、兄と話し合う機会はなかった。兄の夏彦は、葬儀の翌々日、あとのことをかお

りに託して、ミュンヘンへ発った。仕事だと言っているが、そうではないことを、かおりは知っていた。また四十過ぎの、裕福な女をカモにしたのに決まっているのだった。かおりが知っているだけでも、夏彦の歳上の相手は、これまでに三人いた。最初の女は、兄が大学生のときだったから、およそ二十歳近くも年長ということになる。ある著名な政治評論家の妻で、内緒の関係は、夏彦が大学を卒業するまでつづいたようである。二人目の女は、うさん臭い不動産屋の後妻だったが、この女が、最も夏彦に金を貢いだ。三人目の女の素性を、かおりは知らない。ただ、それまでの女と比べて、関係を持った期間が一番長いということだけを知っているだけだった。

「老いを感じ始めたときに浮気に走る女って最低ね」

かおりは、兄が三人目の女とつきあっているとき、何度、兄にそう言いかけてやめたかしれない。かおりが、喉元まで出かかったその言葉を、ついに口に出せなかったのは、当時、十九歳だったかおりもまた、妻も子もある三十五歳の男との恋愛に転がり込んでいたからだった。

相手の男は、かおりの大学でフランス文学を教えていた。かおりの周囲には、妻子ある男との関係を誇示する女子大生も幾人かいた。ある者は、お小遣い目当てであり、ある者は、同年齢の歯ごたえのない若者にあきたらず、小娘などいともたやすく掌に載せられる中年男の、格好の遊び相手になっていた。

かおりの場合は、少し違った。かおりは、真剣に、その助教授になったばかりの男を好きになったのだが、肉体の関係へと進ませたものは、自分もまた生身の女なのだという、周りの友人たちへの反発だった。

かおりは、自分の外見が、ひどく子供っぽくて、世に言う〈いい子〉の典型みたいであり、両親を早くに喪ってはいたが、厳格な伯父に育てられたことで自然に身にそなわった礼儀正しさや、ある種

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com